

埼玉経済

あさひ(行田市)

廃ガラスの再資源化へ

あさひ

埼玉の現場から

特許技術を生かし、解決が求められる廃ガラスの再資源化に貢献する機械の開発に取り組み企業がある。2018年11月に創業した、行田市の「あさひ」の社の歴史はわずか5年余りだが、業界で注目の存在になりつつある。

中村典雄社長(67)は元々、店舗開発事業を手がけていた。その傍ら、子ども好きが高じて乳児院を設立するなど、社会福祉分野へ進出。さらに、太陽光発電パネルの処分にも携わり出した。そして、パネルに使われるガラスが、ほとんど埋め立て廃棄されている現実を知る。「自分で何とか

したい。リサイクルできる機械を作ろうと思った」と決意。店舗開発から手を引き、あさひを立ち上げた。国内では30年代に、耐用年数を迎えて処分される太陽光発電パネルが大量に発生すると見込まれる。環境への負荷を減らすため、政府はリサイクルの義務化を検討。早ければ、25年の通常国会に関連法案を提出する方針だ。

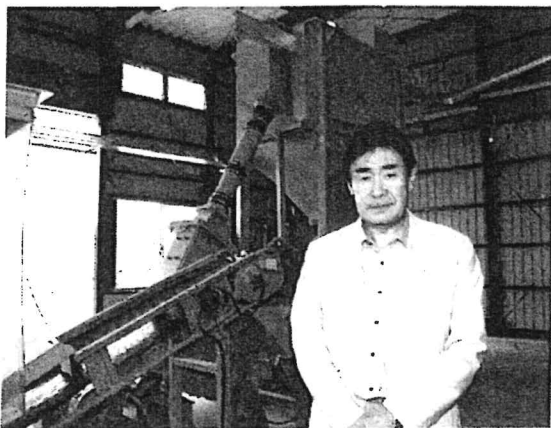
ところが、パネルは金属を含むセルなどがガラスと貼り合わされており、分離するのが難しかった。中村社長は、大手ガラスメーカーでリサイクル機器の研究をしていた技術者を招聘(しよつへい)。ガラスを剥離できる「クリスタライナー」と、分別したガラスを粉砕する「ミルサイザー」

特許生かし機械開発

を開発した。これらの機械とガラスのリサイクルシステムは、計3件の特許を取得している。

ガラスは角がない砂粒ほどの細かさまで碎けるため、さまざまな用途に活用できるという。砂場などの砂として使っても危険はなく、再びガラスにすることも可能。22年度には、環境省の環境技術実証事業で、資源循環技術領域の承認を受けた。日本は主な原料となる珪砂(けいさ)を大量に輸入しており、中村社長は「埋め立て廃棄されているガラスは大切な資源。使いは無限にある」と言っ

た。開発した機械は1辺の大きさが約2.5と小型で、運搬もしやすい。価格は2千万円弱、3千万円程度。他社が取り扱う5千万円、数億円もする既存の据え付けタイプの大型リサイクル機械に比べ、かなりの廉価だ。しかも、熱を使わず、音も静か。これまで数社に納入され、稼働が始まっている。中村社長は「ガラスのリサイクル分野に革命を起した」と展望した。(田付智大)



ミルサイザーで大きさの異なる粒に砕かれたガラス

▲納入先の杉浦土木で稼働している廃ガラスを粉砕する「ミルサイザー」と中村典雄社長(行田市堤根

あさひ 行田市行田12の12(☎0488・5988・8766)。